

2010 年度 FD 活動評価点検報告書

1. 中部大学の FD 活動組織について

本学における教育活動・改善に向けた教員の資質向上策としての FD (Faculty Development) 活動は、学長を委員長とした全学 FD 委員会のもと、各学部 FD 委員会および各学科組織があり、全学体制の FD 活動ワーキングが中心となって種々の検討を行っている。また、教育活動顕彰審査選考委員会や FD 活動評価点検委員会が図 1 のように組織されており、FD 活動の内容について評価できる体制が整っている。なお、全学 FD 委員会および学部 FD 委員会は、2007 年度まで本学に設置されていた FD 推進委員会、学部での FD に関する諸活動を 2008 年度より新しく改変した組織である。また、大学教育研究センター（教員 3 名、事務員 4 名で構成）が主管部署として、FD 活動の推進、支援を行っている。

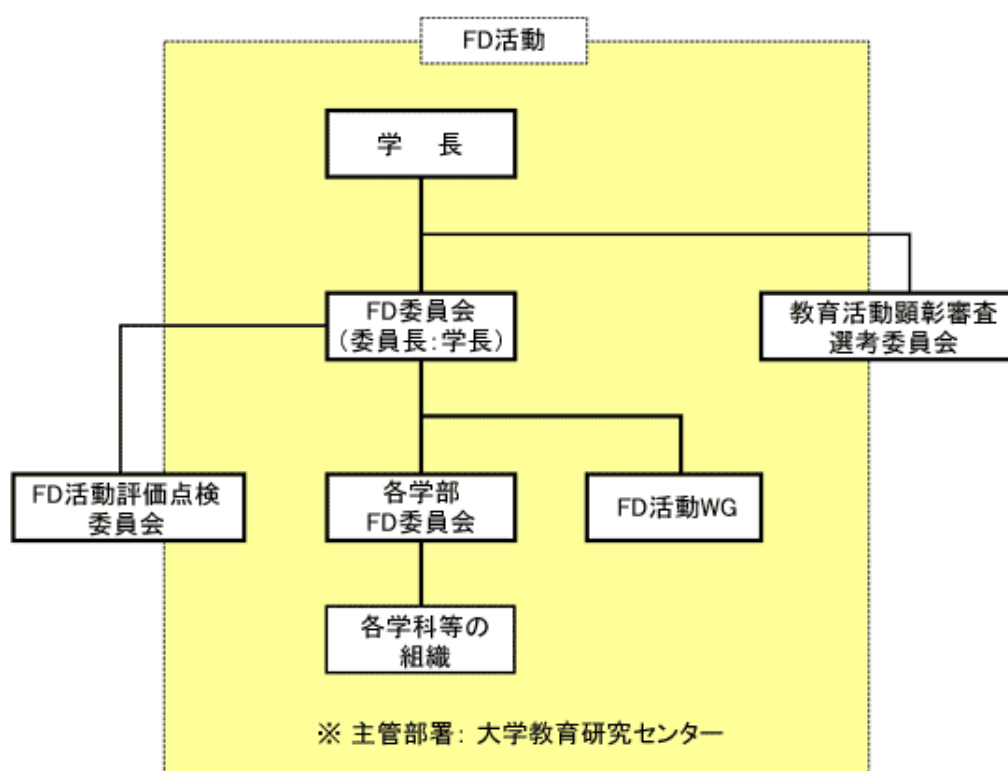


図 1 中部大学の FD 活動組織図

FD 委員会 : 本学の FD 活動全般について、学長を委員長として審議、検討をする。

FD 活動 WG : FD 委員会の専門委員会として、学部代表の FD 委員を中心に主に全学的な活動を企画する。

FD 活動評価点検委員会 : 本学の FD 活動全般について、第三者的な立場にたって評価点検をする。

教育活動顕彰審査選考委員会 : 教育活動顕彰制度に係る重要事項、および受賞者の審査、選考する。

2. 本学の FD 活動評価点検の対象

本学の FD 活動は、次の表に示すように 3 つの観点から分けられる。広義の FD 活動の目的となりうる「カリキュラム改善」や「組織の整備・改革」に関する諸活動は、FD 委員会の所掌事項でないため、これらを目的とした活動（網掛け部）は、本報告書の内容には含めていない。なお、授業担当者のみの授業改善の活動は、「教育活動重点目標・自己評価シート」と「学生による授業評価、教員による授業自己評価」によって実施され、後者は学内向けに HP 上で公開されている。

表 1 3 つの観点でみた中部大学の FD 活動

【※1】 3 つの観点でみた中部大学の FD 活動（網掛け項目は除外する項目を表す）

目的別にみた FD 活動	対象別にみた FD 活動	形式別にみた FD 活動
1) 授業・教授法の改善	1) 全学対象	1) 会議・打ち合わせ
2) 教員の資質向上（研究交流を含む）	2) 学部対象	2) 懇談会
3) FD 活動の企画・運営など	3) 学科・教室対象	3) 講演・報告会・セミナー
カリキュラム改善	(*1) 非常勤を含む	4) ワークショップ
組織の整備・改革	(*1) 学生を含む	5) 制度・システムなど(*2)
	授業担当者	

(*1) : 対象別 1)～3) で非常勤を含む場合、学生を含む場合

(*2) : 授業評価システム、授業改善アンケートの制度の運用やシステムの構築、および出版などが該当

3. 2010 年度の FD 活動の重点目標

FD 活動の重点目標として『魅力ある授業づくり』への取り組みを 5 年間を目安として実施しており、この目標を達成するために継続事業を含めて新たな事業に取り組んだ 3 年目である。個人レベルから、学部学科を越えたグループ、学部学科、全学を対象に活発な FD 活動を進めてきており、学生の生の声を聞き、学生とともによりよい授業にしていく努力を全学として続けている。こうした中、教育現場である各学部では、以下のような 2010 年度の目標を掲げ、FD 活動に積極的に取り組んだ。

- (1) 工学部 : ①他学科・教室の FD 活動を知る。②工学部 FD 活動実質化の継続推進。
- (2) 経営情報学部 : ①DP の確立のために既に掲げてきた「教育目的」を定常的に見直し改善していく習慣を身に着けること、②新設科目の「自己開拓」の教材と授業法の研究。
- (3) 国際関係学部 : 教員の資質向上、授業改善に関する検討、各学科の将来展望をテーマとした FD 活動の実施。
- (4) 人文学部 : 授業改善取組みのための具体的な方法。
- (5) 応用生物学部 : FD に関する講演会の実施と各学科における FD 活動の充実。
- (6) 生命健康科学部 : 新たな FD 評価基準の設定と学部としての教育活動顕彰制度への積極的な参加。(保健看護学科では、①教授力(臨地実習指導力)の向上、②質的研究方法の推進、③臨地実習施設の指導者および教員の資質向上を目的とし

た看護セミナーの開催、④大学のFD活動の方針に沿った取り組み。))

- (7)現代教育学部 : 授業改善、授業支援の具体化を進め、そのための資料収集と情報の共有、課題の検討などの実施。
- (8)教養教育部 : 教育の質の維持と教員の資質向上。
- (9)工学研究科 : ①大学院進学率の向上、②大学院生の質的向上～国際化に向けての英語力の向上、③大学院ホームページの立ち上げと英文冊子の作成、④学生の質的向上の増加と魅力ある大学院技術者教育プログラムの構築および情報発信。
- (10)国際人間学研究科 : 大学院で学ぶ院生の研究環境を充実するための現況把握。

3年目となった『魅力ある授業づくり』は浸透し続けており、各学部・各学科で具体的活動に対する現状の振り返りや教員意識の向上といった特徴の目標が掲げられた。なお、年度ごとの自己評価を行う上でも学部の内容に適応した、より具体的な目標設定が望まれる学部もある。2010年度の現状把握からの次年度以降の目標設定、展開が期待される。

4. 2010年度のFD活動の取り組み

4. 1 全学の取り組み

2010年度の全学としての取り組みは、大学教育研究センターHP (<http://www.chubu.ac.jp/fd/>) に詳細が記されている。主な取り組みは、①教員による教育活動重点目標の設定、②授業改善の取り組み、③FDフォーラム・講演会、④FDに関する研修会・説明会等、⑤出版物、⑥教育活動顕彰制度の実施に分けられ、主な点についての現状と評価を記述する。

① 教員による教育活動重点目標の設定

2002年度より実施した「ポイント制による教育総合評価・表彰制度」の一環として始めた「教育活動重点目標・自己評価シート」は、現在、教育活動の評価制度の必須データとしてではなく、教員個人のFD活動を自己点検評価することを主な目的として実施している。年度初めに、各教員が教育活動重点目標を設定し、年度末に自己評価する方法をとっているが、シートは学部により自由形式としている。

2010年4月1日現在の教員在籍者は444人、そのうち海外出張等で記入ができない教員9人を除いた435人中429人が目標を提出した。年度末の自己評価の提出は、目標設定者422人中(目標提出者のうち7人は退職や海外出張中)417人であった。

② 授業改善の取り組み

『魅力ある授業づくり』のための主な取り組みとして、以下の6つを取り組んできた。

1) Webによる「学生による授業評価」「教員による授業自己評価」

後述の授業改善アンケートシステムと同様、「学生による授業評価」はパソコンからの回答方式のみであったが、携帯電話を活用した回答機能を追加して秋学期から運用を開始、受講生の回答方式を増やすことで、学生の回答率アップを目指した。「教員による授業自己評価」は、従前どおり「Web入力方式」のみであるが、教員が授業の振り返りをするともにも少しでも多くの学生からの意見を認識するよう改善した。「授業評価」では、学期末に自由記述も含めた「学生による授業評価」と「教員による授業自己評価」を共通設問で実施し、その結果の公表は、数値だけでなく教員による「学生からの自由記述のまとめ」と

「教員からのコメント」を全学生、全教職員に対して公開した。

2010年度の学生の回答率は、春学期約18%、秋学期約13%で、秋学期の回答率は春学期に比べると例年どおり減少はしているもののWebによる「学生による授業評価」を採用した2008年度からでは最も高い結果となった。このことは、携帯電話を活用した回答機能を追加したことによる効果が現れたと考えられる。一方、教員の自己評価回答率は、春・秋学期平均専任約53%、非常勤約40%であった。

自由記述は2009年度に比べて約5%増（春・秋学期合わせて5,368件）であった。これらの取り組みにおいて、学生の生の声をシステムとして取り入れやすくなった点は評価できるが、今後、学生の回答率増加に向けた教員の働きかけや教員の自己回答率、コメント率がさらにアップすることが望ましい。

2) 携帯電話を活用したクリッカーシステムの提供（授業改善アンケートシステム）

「授業改善アンケート」システムは、授業担当教員が、該当科目の開講学期期間中に受講生に対し、随時授業改善のためのアンケートを実施できるシステムである。秋学期には、このシステムを機能拡張して、「携帯電話入力方式」も採用し、授業中に教員がネットを繋ぐことができる環境であれば、学生の反応を瞬時に把握できるクリッカーシステム「Cumoc（キューモ：Chubu University Mobile Clicker）」を独自に開発、運用を開始した。なお、「授業改善アンケート」は、秋学期のクリッカーとしての活用を含めて通年で161件の利用であったが、今後、更なる活用の増加が期待される。

3) 授業改善ビデオ撮影支援制度

授業担当者からの希望による授業ビデオ撮影支援制度の2010年度実績は23件で、授業サロンにおける授業担当者の振り返りのための撮影を10件含んでいる。

4) 授業のオープン化制度

授業担当者に申し出ることで、他の教員が授業を参観できるシステムであるが、2010年度に実施報告があったのは1件であった。ただし、後述の「全学公開授業」「授業サロン」もこの趣旨を基に実施している。

5) 全学公開授業

「全学公開授業」を3件実施し、毎回10名を越える教職員の参加があった。また、内1回は、Cumocを活用した授業の公開を行い、授業担当者および授業見学者ともに有益な情報を得る場となった。

6) 授業サロン

「授業サロン」では、学部間を越えた5人の教員による授業見学とピアコンサルティングを行っている。春学期1グループ、秋学期1グループ実施され、授業の振り返り、また授業改善のヒントになる点について意見交換された。参加者は、応募または推薦による形をとっているが、徐々に応募教員の数が増えつつある傾向にある。3年目になるこの取り組みは、学部を超えたFDネットワークづくりに貢献しており、本学FD活動を推進していく上での大きな原動力になることが期待できる。

③ FDフォーラム・講演会

外部講師を招き7月には「教育の質の保証と教育支援」、12月には「三つのポリシー（DP、CP、AP）」に関するFD講演会をそれぞれ開催（参加者70名、90名）、また3月には、学

内教員による『魅力ある授業づくり』について「Webによる入力方式」となって2年間の授業評価分析結果の報告に関するFDフォーラム（参加者71名）を開催した。テーマの企画立案については、これからの大学教育の方向性を鑑みつつ、ミニマムレベルのFD活動（授業・教授法の改善、教員の資質向上、授業評価）からも本学に特化した内容を導き出していくことが必要である。

④ FDに関連する研修会・説明会等

新任教員説明会では、学長、事務局長、大学教育研究センター長から、本学の建学の精神、大学理念、本学のFD活動等が説明されている。ここでは、大学の説明に重点を置いているが、「話し方・板書の仕方」「大人数教育の授業」など授業スキルの「教員キャリアアッププログラム」を実施しており、2010年度では3回開催した。なお、参加教員は幅広い年齢層の教員が参加しているが、特に教歴の浅い教員に積極的な参加を促す環境が必要である。今後は、定型的にキャリアアッププログラムの実施を企画していく上で講師の確保が課題となっている。

⑤ 出版物

「教育・研究活動に関する実態資料」および「中部大学教育研究」を発刊しており、前者は様々な基礎データを集約し、学内各種制度や対外的な申請や審査の基礎資料として活用され、大学の情報公開資料作成の一部に利用している。今後、教育情報公表との関係について検討していく必要がある。また、後者は1979年より発刊されてきた「教育資料」を充実させ、新時代の大学教育の理念・手法・改善策などを論じ合う場を提供し、教育改善・質的向上に役立てることを目的に2001年から発刊され教員の情報共有の場ともなっており、研究論稿は教育研究の分野でも引用されている実績を有している。

⑥ 教育活動顕彰制度

2008年度より学部での評価の重みを増加し、また個人だけでなく団体、グループに対しても表彰できる特別賞を取り入れた「教育活動顕彰制度」を導入し、2009年度の「教育活動優秀賞」は12名、「教育活動特別賞」は2グループが受賞した。実施要項、審査総評等はHPで公開している。

4. 2 学部・研究科での取り組み

各学部・各研究科においてFD活動評価点検報告書を作成しており、提出された報告書から2010年度の学部・研究科・学科、および大学教育研究センターが行ったFD活動の特記すべき事項を先の表1に示した3つの観点別に抽出し、そのデータ件数をグラフにまとめた。

① 「授業・教授法の改善」に関する主な取り組み

- (1) 学部でのFD講演会
- (2) 教育関係・授業アンケート
- (3) 創成科目報告会
- (4) 授業反省会

② 「教員の資質向上のための研究交流」に関する主な取り組み

- (1) 効果的な教授法や授業運営の精査、外部研究者との交流
- (2) 外部機関と実習指導に関するセミナー

(3)FD 活動に関する勉強会

③「FD 活動の企画・運営など」に関する主な取り組み

(1)中堅教員と新任教員との懇談会

(2)FD 会議や定例学科・教室会議などでの調査報告や企画運営など

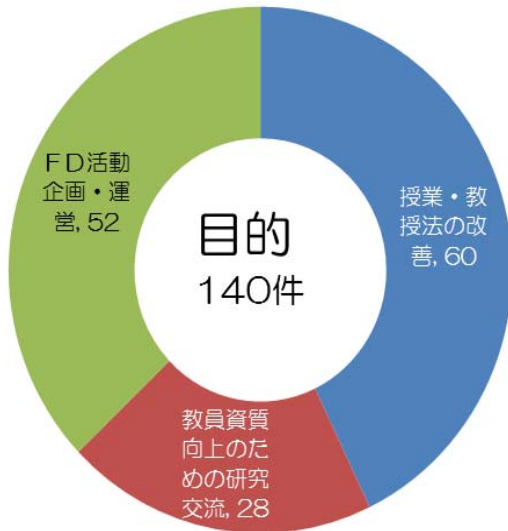


図 2.1 目的別にみた FD 活動

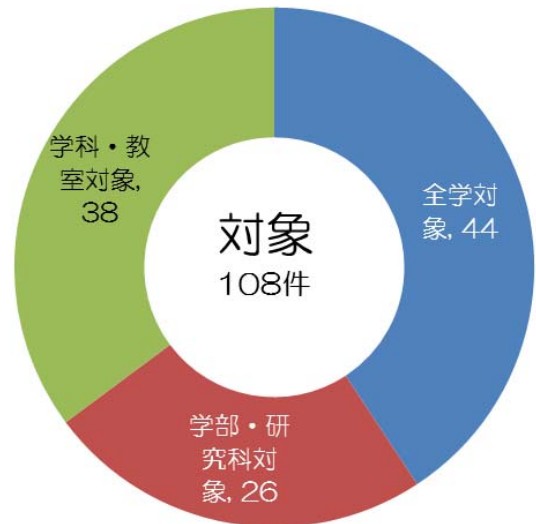


図 2.2 対象別にみた FD 活動

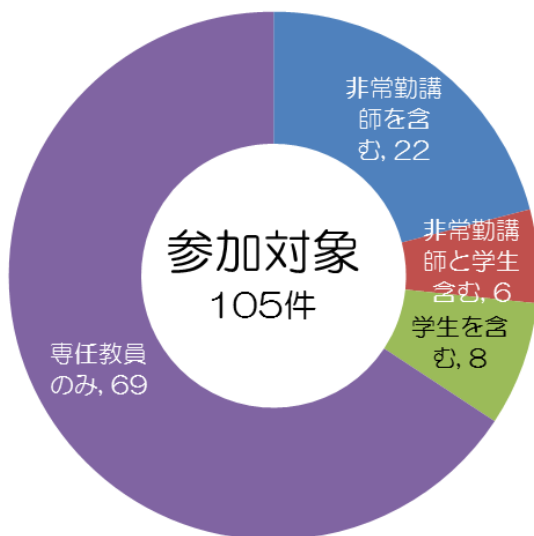


図 2.3 FD 活動の参加対象

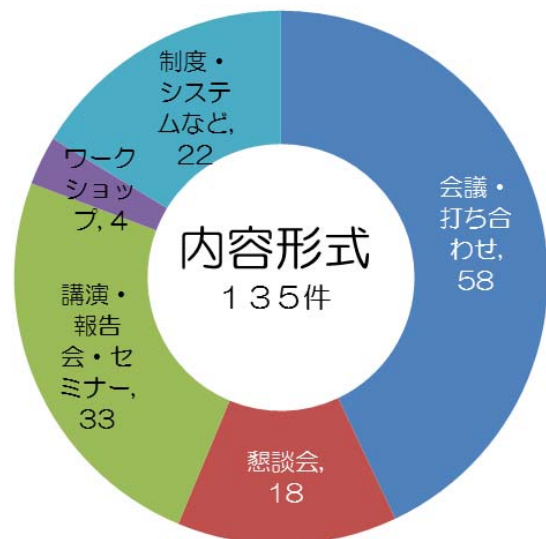


図 2.4 形式別にみた FD 活動

(※合計件数は、重複項目があるため一致しない)

図 2.1～2.4 から、本学の FD 活動は、目的、対象、内容についてほぼバランスよく実施されていることがうかがえるが、学生参加の FD 活動の取り組みやワークショップ形式がやや少ない傾向にある。学生参加型の FD 活動は企画内容や方法の再検討、ワークショップは講師確保の解決が必要と考えられる。

今後、これらの取り組みに対する実績や成果に対する振り返りの分析結果を有効に活用し、

各学部・研究科・学科に即した FD 活動の取り組みが改善されながら継続していくことが重要である。また、学部間を越えた情報の共有の場として「中部大学教育研究」や学内広報誌に公開していくことが望ましい。

5. FD 活動に関する課題と今後の計画

引き続き、授業評価の回答率の改善（学生による授業評価回答率、教員による授業自己評価回答率、教員によるコメント率）、教員研修制度の充実などが望まれる。また、各教員の FD 活動を実施していく中で評価点検にも繋がる「教育活動重点目標・自己評価シート」を実施しているが、これを進化させる形での「ティーチングポートフォリオの導入」についても今後検討していくことが期待される。

一方、学部学科レベルでは、『魅力ある授業づくり』を目指して、全学ベースの FD 活動支援事業を利用しながら、各学部・研究科・学科に即した FD 活動の取り組みと点検が重要であり、そのためにも学部・研究科・学科における FD 活動に関する振り返りに対する、より具体的な目的設定が必要である。